

都市空間の中の彫刻—私の試み(1)

小林 令明

1. 都市空間に彫刻物を設置する現実

日本の主要な都市のビルの正面に、あるいは内部空間に彫刻がしばしば置かれるようになったのが、最近の傾向である。ここ数年にはわかにより多くなり、世の中の芸術に対する好みと理解は、その幅を広げたかに見える。以前と較べるならば確実にその様な方向にはあるが、ビル建設の発注者にとっては、工事の最後にかかる無駄な出費であるとの考えは、依然として強く、広告物の看板であるならば設置のための出費は必要と考えても、彫刻物であると止めておくことの方が、まだ支配的である。施主にとってビル工事は、たいてい見積予算よりは膨らむことであり、かなりの要求事項を詰めているので、芸術品ではなおさらである。

これを実現するためには、芸術品の設置を大事と考える施主であるか、それとも建築家の勧め、あるいは施主の身近にいる影響力のある芸術品設置推進者のうながしがないと、事は運ばないのが現実である。

ヨーロッパの一部の国々や、アメリカ合衆国においては、建設行為をおこなう場合、その建造費の1%を芸術振興予算として、芸術作品の購入を義務づけている事実があるし、アメリカ合衆国には1967年にNEA（国立芸術基金）ができ、芸術作品を設置に関するプロジェクト費用の半分を、国が援助する推進制度ができた。これにより、アレクサンダー・カルダーやイサム・ノグチ、デュビュフェ、マーク・ディ・スヴェロー等が、大きく、優れた作品を設置し、この後都市の中への設置思考は進んでいった。それから25年たった日本では、今だ国の芸術基金はなく、1%の義務づけもなく、ほったらかしのままである。

2. 都市空間の中にあるべき彫刻像は何か

芸術作品を設置する意欲のある施主や推進者に恵まれて、現実に設置をする話が生まれたとしよう。この時間問題になるのは、本当に良い作品がその場

に置かれるだろうか、という事である。この事は一番気かけなければならぬ。依頼主も、建築家も、彫刻家も一番本当は気にしているところである。作品を置いたが、置かなかった方が良い作品や、設置することで、より繁雑でゴミが一つ増えた意味しかない芸術作品では、迷惑千万である。

大通公園には、幾つものその時代時代に置かれた彫刻作品があるが、後世の人間に見られて、かんばしく思われない作品は不幸である。いっそ彫刻を置くより、木を植えた方が良い場合も考えられる。実際私が設置する場所を考える時、まず木を植えるべきかを考える。木より、負ける作品はやはり消えていかねばならない。

3. 私的な試み(1) - 作品の説明 -

発想イメージ

- 風のようにさわやかな軽み
- 豊かさにつつまれた豊穡と発展性

これ等を形象化する形を見つけるのであるが、イメージは第1回目の建築設計者との話し合いの中で浮かんで来たが、最終的な形にするのに4ヶ月程迷い、20組程のデッサンと、製図化した形4組、現場へ行っての思考多数を行った後に決定する。

以下は作品を生ませるまでの私が自分に科せた注意事項である。

- ①最初の思いつきは大事にする。
- ②たえず木を植えた方が良いのではないかとの判定をし、樹木より作品設置が好ましいと納得した場合のみ、その場の形を考える。
- ③現場百回を心がけ、できる限り現場に行き思念する。
- ④人の動き、見る人の視線からの確認をする。
- ⑤のびやかで、見る人に心の張りを与える、生きる方を与える作品を作る。

名 称：五月の風

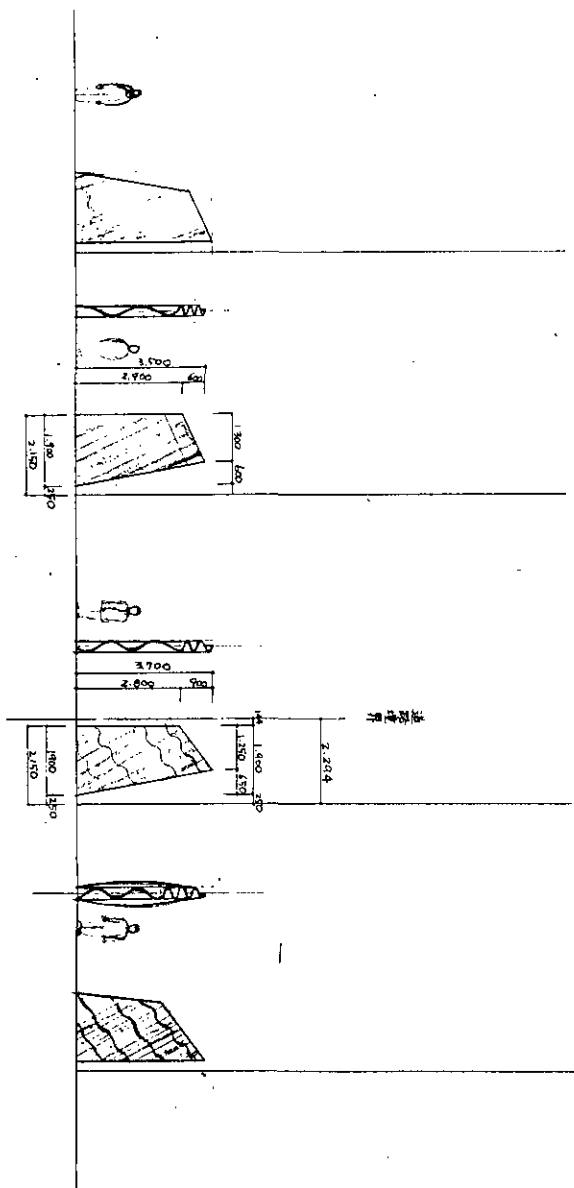
材 料：ステンレス

寸 法：巾2.350×H3.230×厚16

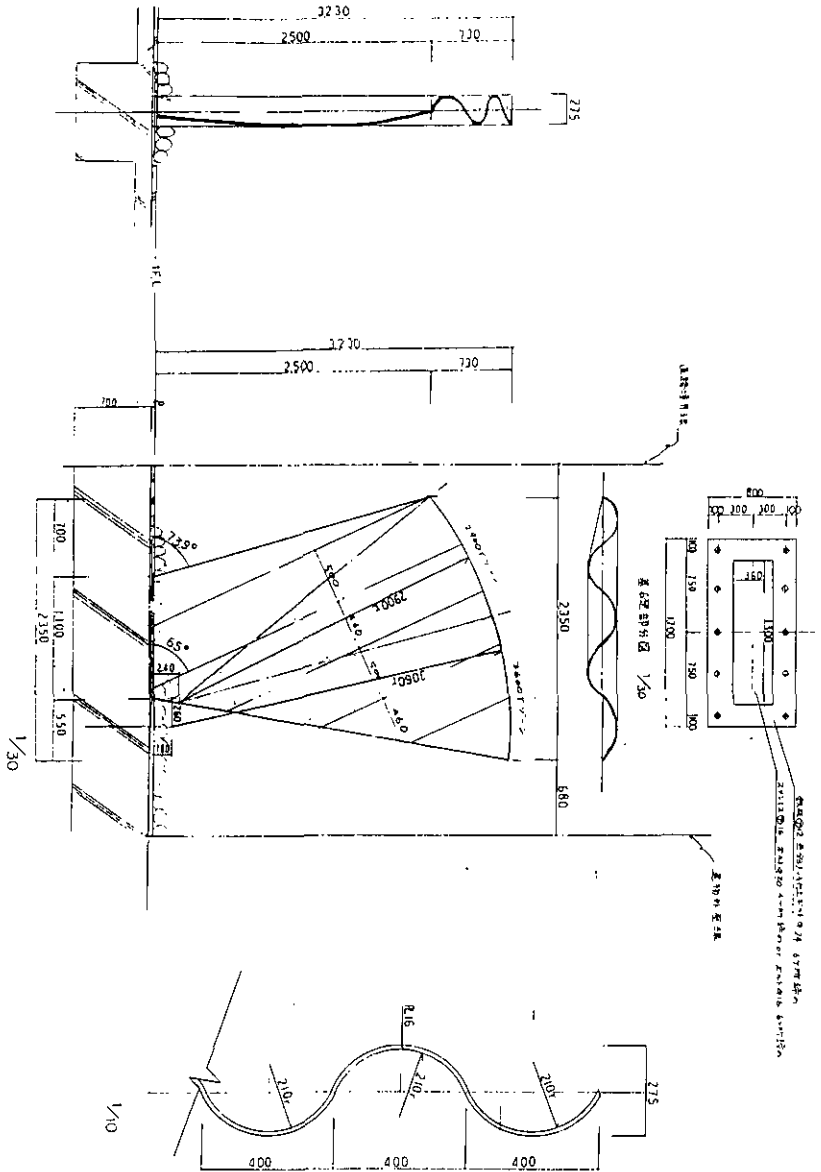
所在地：札幌市中央区南1条西12丁目4-94扶洋第1ビル

都市空間の中の彫刻—私の試み(1)

習作のためのデッサン



小林 令明



都市空間の中の彫刻—私の試み(1)

